

3. 大原D・元岡型スクレーパーについて

(1) 元岡・桑原遺跡群 58次地点のスクレーパー類

IV層から6点のスクレーパー類が検出されている。全出土数の3.5%に当たり、58次地点では最も高い割合である。周辺遺跡に比べても、組成率は高いと言えよう。大きく二つの形態に分類でき、一つは（A類と仮称）背面に細調整を施し、正面に斜め細調整を施した縦長のスクレーパーである（図89 S349～352）。他は（B類と仮称）幅広剥片の端部に細調整を施し、弧状に近い刃部を形成したものである（S353・S354）。両者共に黒曜石製と安山岩製がある。A類は縦長状の剥片、B類は幅広剥片を素材としている。両類型ともに素材の形態に統一性はないようであり、素材生産技術も明確でない。石材と形態との関連性も、現段階では明らかでない。

S349は基本的に拇指状搔器、S351は縦形の搔器であるが、S350やS352は下端部への刃部調整が顕著でなく搔器とは呼べない資料である。共通するのは背面への平坦細調整と正面の斜め細調整であり、本文化層を特徴付ける特徴的な形態と言える。斜め細調整の部位は、必ずしも同じ部位ではない。S353・S354に近い円形搔器は、第Ⅲ③層で2点出土している（図73 S258・S259）。これらは典型的な円形をなし、黒曜石製と安山岩製がある。背面に細調整を施しており、その部位は第Ⅳ層A類例と類似しているが、形態的には、B類の典型例として位置付けることが可能である。58次地点では背面調整を施した縦長のスクレーパー、円形搔器という二種のスクレーパーが存在している。本稿ではそれらの出自について検討し、定形石器と環境の関係を究明したい。

これらのスクレーパー類は58次地点の他の文化層には認められず、時間を限定して現れる特徴的な形態と言えよう。それを明確にするため、周辺遺跡の検出状況を明らかにし、この形態のスクレーパーの実態を明らかにしたい。

(2) 周辺遺跡のA・B類スクレーパー

元岡・桑原58次地点第Ⅳ層・Ⅲ③層のスクレーパー類をもっと良く理解するため、その時代を代表する大原D遺跡や松木田遺跡など福岡地方該期遺跡の実態を明らかにしたい。

① 大原D遺跡14区のスクレーパー類

I層で搔器2点、削器11点、II層で搔器30点、削器87点、III層は搔器53点、削器126点のスクレーパー類が検出されている。狩猟具として、石鏃（I層37点、II層304点、III層287点）、石槍（II層9点、III層4点）が出土した（池田ほか2003）。池田裕司のご好意により、未発表資料の公表を許していただいたので、搔器を中心に図152～157（O89～167）に示した。報告書にも述べられているように（池田ほか2003）、多様な形態のスクレーパー類が出土している。

大原D遺跡14区は無文土器が古く、条痕文土器が新しく位置付けられる（池田ほか2003）。それらの割合から、IIIk～IIIb層→IIIa層→II層という新旧関係が成立つ。分層が困難なJ-T区はII層と同じような土器の割合を示し、U-1C区はII・III層の中間的様相で、IIIa層に近い存在ではないかと思われる。

a) 背面調整スクレーパー（図152～154 O89[I層]、O90～96[II層]、O97～109[III層]、O110～112[J-T区]、O113～116[U-1C区]）

正面への斜め細調整と、背面の平坦細調整によって特徴づけられる。O89（I層）はやや寸詰まりながら、A類の典型例（S349）に近い形態と言える。O91、O95、O99～102、O110、O112、O115、O116もその類例と言えるだろう。O90やO96は折断されているが、本来A類に近い形態であったと思われる。O92、O94、O113などは円形スクレーパーに近いと考えられる。

端部はO89のように弧状を呈するものが多いが、O99～101は直線状である。背面調整はO99、

O105、O116のように全面に及ぶものもあるが、大半は部分的な調整である。厚さを減じるためのものと思われるが、調整を行うことにより、背面刃部付近が平坦ではなくなっている事例も多い。それが目的かも知れないが、その原因究明は今後の課題と言える。正面の斜め細調整は、端部付近を中心に両側縁に認められる。図示した事例は全て端部に細調整痕が認められるが、報告書Fig.67図450（池田ほか2003）のように端部細調整が顕著でないものもある。

O101のような安山岩製の大形品もあるが、多くは黒曜石の小形品である。安山岩製もO89やO106のように小形品もある。背面調整スクレーパーの多くがA類と思われるが、円形搔器や弧状調整搔器に近いものから、四角形のものなど多様な形態的特徴を有する。58次地点よりも、形態的統一性に欠けている。製作技術において、よりルーズなレベルにあると言えよう。報告書の図409、427、428、450（池田ほか2003）もA類と考えられる資料だが、同じく多様な形態が認められる。

このように、大原D14区段階は背面調整と正面への斜め調整を施したスクレーパー類は多数存在するが、定型化した存在とはいえない。多様な形態から、時間をかけて一つのものに収束しようとしていると考えられるのである。

b) 円形搔器（図155・157 O127～132[Ⅲ層]、O151～162[U-1C区]

報告書掲載の図404、407、410～414、417、419、420、425（池田ほか2003）も、円形搔器の可能性があるが、その中には背面細調整を施したものもある。弧状スクレーパーの系譜を引く円形搔器は、本来背面細調整を施さないと考えられる。図411、413、414は石核素材と考えられ、404はA類の可能性がある。419・420は、周辺加撃（求心状剥離）石核から剥離された厚手剥片を素材とする典型的円形搔器であるが、部分的な背面細調整を施している。O127、O132、O152、O161、O162も同じような細調整が認められ、背面調整を施す事例が一定量組成されている。

これらは典型的な円形搔器であり、A類（背面調整スクレーパー）とは異なる種類のスクレーパーと考えられる。しかし、A類の影響を受け背面細調整を行うようになった可能性は高い。本遺跡のスクレーパー類は、背面細調整を行う割合が高いのが特徴と言える。石核素材のスクレーパーも、一見背面調整を施したかのように見える。

小形円形搔器の大半はⅢ層（特にⅢa層）とU-1C区から検出されており、比較的初期段階のものと思われ、II層以降その割合が急激に低下している。その素材を生産する周辺加撃（求心状剥離）石核もⅢ層やU-1C区でその割合が高いが、II層にも多数組成されている。よって、この石核は円形搔器以外の器種の素材を剥離していたと考えられる。また、黒曜石の円礫と強固に結びついており、西北九州の針尾島中町などの原石が大量に持ち込まれている。西北九州との結びつきの強い器種と考えられる。

c) その他のスクレーパー（図154～157 O117・O118[Ⅰ層]、O119～126[Ⅱ層]、O133～148[Ⅲ層]、O149・O150[J-T区]、O163～167[U-1C区]

多様な形態があり、その数も多い。O117のような縦長剥片などの側縁に細調整を施したサイド・スクレーパー、O146のような縦長剥片の端部に細調整を施した背面調整のないエンド・スクレーパー、貝殻状剥片などを素材とする弧状調整（O166）・直線状調整（O167）スクレーパー、O139～141のような抉入石器などである。報告書には、エンド・スクレーパー（図406）、弧状調整スクレーパー（図454）を始め、多様な形態のスクレーパー類が図示されている（池田ほか2003）。

これらも黒曜石製と安山岩製があり、素材も縦長剥片、貝殻状剥片、横長剥片など多様である。複数の素材生産技術が用いられている。用途も複数あるものと思われ、複雑な行動を行っていたことがスクレーパー類の形態から想定される。

d) スクレーパー類の技術・形態的特徴

スクレーパー類の割合は、特にⅢ層で極めて高く（剥片・碎片除き23.5%、II層11.4%）、背面

にも細調整を加えた円形刃部搔器（A類と円形搔器）を特徴的に組成している。本遺跡におけるスクレーパー類は、複数の素材生産技術と多様な形態が認められ、その数も多く、特異な存在と言え、早期には認められない在り方である（池田ほか2003）。

しかし、円形搔器や弧状調整搔器、A類の一部など多くのスクレーパー類は、厚手の寸詰まり剥片や貝殻状剥片を素材としており、素材に一定の規則性が認められる。これらは、前述の周辺加撃（求心状剥離）石核から剥離された剥片を用いていると思われる。スクレーパー類の多くは、特殊な素材生産技術と強力に結びついているのである。特に、円形搔器はこの時期に初めて大量生産されるが、それを支えているのが周辺加撃（求心状剥離）石核と言える。縦長剥片剥離技術（報告書図479）は、縦長の搔器や削器の素材生産のため残存した技術と思われる。磯道型に類似する石核は、この後も変容しながらも存続しているようである。

背面細調整を施した事例の多い点も、本遺跡の特徴といえる。A類との結び付きが強いようであり、その出現と共に広まった技術と思われる。細石刃石器群以前の北部九州では、スクレーパー類への背面調整はあまり行わない技術なのである。大原D遺跡は、小形の背面調整スクレーパーと円形搔器という二つの器種によって特徴付けられ、草創期末の典型的な姿がここに見られる。

② 福岡地方のスクレーパー類

草創期最終末と考えられる松木田遺跡4次調査2区は、両面に細調整を施した小形円形搔器が検出されている（長家・米倉ほか2013）。石鏃が二等辺三角形鏃を主体とするので草創期と判断したが、文様の明確な土器は認められない。石鏃、楔形石器を中心とする石器製作の場と考えられる。

大原D遺跡15-3区は、典型的なA類と円形スクレーパーが出土している。円形搔器は黒曜石円礫の一部を用いた小形製品で、ほぼ全周に斜め細調整を施している。A類も黒曜石製で、端部や一側辺に斜め細調整を施し、背面には全面に荒い平坦調整が認められる（池田・荒牧ほか2003）。両者とも針尾島中町産黒曜石と推定され、大原D14区と共通している。

その他、元岡・桑原3次地点でもA・B類を含むスクレーパー類が検出されている。円形スクレーパーは比較的多く、黒曜石、安山岩の両者が用いられ、背面調整を施したものもある。A類は極めて少数だが、背面調整を施したやや縦長の円形刃部搔器、背面調整の明確でない縦長円形刃部のスクレーパー類が認められる（菅波ほか2004）。しかし、3次地点は複数の文化層が重複しているため、これらのスクレーパーの時間的位置付けは明らかでない。

その他の遺跡では、明確な円形刃部搔器は確認されていない。このようなスクレーパーは、時間的に限定し発達するものと思われる。大原D遺跡Ⅲ層は、その放射線炭素年代や花粉分析などから寒冷化の著しいヤンガー・ドリアス期の初頭に位置付けられる可能性が高い。その他の遺跡・文化層もヤンガー・ドリアス期に位置付けて矛盾はない。円形刃部のスクレーパー類は、寒冷期の狩猟活動（皮革加工活動）と結びつくものと考えられている（堤2000、萩原2001・2008）。

③ 大原D・元岡型スクレーパーの設定

B類の中で小形円形搔器は、大原D遺跡Ⅲ層において最も発達している。針尾島中町など黒曜石円礫と結びつき、大量生産されている。図155 O127～132、図157 O151～162のような、円礫素材の周辺加撃石核から剥離された貝殻状剥片を素材とする小形円形搔器は、大原DⅡ層には殆ど組成されず、その他の遺跡でもあまり認められない。極めて短期間発達した石器製作システムと考えられ、ヤンガー・ドリアス期の短期間においてもスクレーパー類の形態的変遷が考えられる。大原DⅢ層段階において円形搔器への背面調整は稀であるが、58次地点ではその殆どに施されている。この点はA類スクレーパーとの共通点になっており、製作技術においても接近しているようである。

黒曜石製小形円形スクレーパーは、西北九州において出現したと考えられるが、その素材生産技術は明らかにされてなかった。その意味では、大原D遺跡の事例は貴重なものと言える。小形円形スク

レーパーは、細石刃石器群に見られる周辺加擊石核から剥離された貝殻状剥片素材の小形不定形スクレーパーに起源を持つと考えられる。その意味では、北部九州独自の器種であり、その素材生産技術は土器出現直前の福井4層に起源があると考えられる。

これに対しA類スクレーパーは、後述のように直谷岩陰II層段階の尖頭スクレーパーとの関連性が考えられる。A類は安山岩製品の割合が高く、その可能性全くない訳ではない。しかし、大原D段階ではそのような形態は認められず、直接の関係はないようである。地域集団間交流など、他の要因によりA類が出現した可能性が高い。

A類スクレーパーは、大原D遺跡14区II・III層で定型的なものは認められず、不定形なものが多い。形状、調整加工、加工部位共に統一感は薄い。58次地点IV層段階は、細調整の部位などに共通性があるものの、形状には違いがある。端部正面に斜め細調整が認められないもの（図89 S350・S352）もあり、搔器と言えないものもある。これは、搔器・削器という器種の概念を超えて発達したことを示しており、B類との共通点も認められる。これは動物解体、皮革製作等に関する一連の行動を行っていた可能性を示唆し、複合的な機能も考えられる。

A類は、周辺地域を考慮しても時間を限定して発達する器種で、福岡周辺地域で独自に発達した型式と言える。安山岩製品の割合が高いことから、B類と異なり、西北九州の黒曜石産地地帯で開発された型式ではないと考えられる。上黒岩岩陰に類似する形態が認められる（春成・小林編2009）ことから、東方からの影響によるものと思われる。素材生産技術の詳細は明らかでないが、柔軟に素材の形状を選び、背面調整という共通点はあるが、斜め細調整を施す位置も決まっている訳ではないようである。素材の形状に合わせて、柔軟に細調整を施していると考えられる。

石器の型式設定は、素材生産技術と細調整手法による規制の厳しいものに対して設定されるのが一般的だが、このような柔軟性のある石器製作に対しても設定可能と思われる。特に時間と地域が限定されており、その進化過程も明らかにされていることから、A類に対し、大原D・元岡型スクレーパーと呼ぶことにしたい。このスクレーパーは、円形スクレーパーなどとともに福岡地方の寒冷適応を特徴付ける型式と言え、寒冷期の極めて短期間存続していた道具である。

(3) 円形刃部搔器と寒冷適応

図137は、旧石器時代最終末から縄文時代早期初頭までのスクレーパー類、狩猟具、その他の遺物の変遷を示したものである。福岡地方は、縄文草創期前半以前の資料に乏しいので関係の深い西北九州の遺物群で補う。福井洞窟4層以前は、同洞窟の7～9層、12・13層においても円形刃部搔器は顕著な存在ではない。よってその出現には、寒冷化以外の要素が必要なのだとと思われる。年代は暦年calBPを表し、寒暖は福井県水月湖における古気候復元に基づいているが、（ ）に北欧の花粉帯による晩氷期編年を記している。水月湖の年代は年縞年代であるが、ほぼ暦年に近いと考えられる。

① 福井洞窟4層段階

黒曜石製の細石刃（図137 79～81）、細石刃核と安山岩製の石槍、弧状調整スクレーパー類などが検出されており、寒冷適応の典型的な姿が認められる。細石刃核は船野型で、打面（甲板）部が平坦な舟形を呈し、小口の一端に細石刃剥離面が認められる（83・84）。石槍は両面に細調整が施されているが、背面は平らで正面は中央部を高く加工している（82）。スクレーパー類は、特徴的な規格的形態を有する定形的なものである。厚手幅広剥片の打面部を残し、その他の部分に整った加工を加え弧状に整形している（77）ものが多いため、やや直線状のもの（78）もある。正面のみに斜め細調整が行われている（鎌木・芹沢1965）。スクレーパー類や石槍は、安山岩を素材とする大形のものである。スクレーパーの正面觀は、原の辻型台形石器に伴うスクレーパーに類似している。ただし、黒曜石製のやや小形のもので細調整は鋸刃状を呈するという違いがある。

最近の佐世保市教育委員会による調査でも、黒曜石製船野型細石刃核に伴い同じよう形態の大形安山岩製スクレーパーが出土している。その放射性炭素年代は13500BP前後で、歴年では約16700calBPであり、温暖化の始まる15000 calBPより明らかに古い（柳田2016）。本調査で土器は認められず、その出現直前の様相と考えられる。

② 泉福寺洞窟10層段階

本地方最古の土器である豆粒文土器（76）が出現する。端部の細調整は弧状とやや直線状の二種類が維持されるが、スクレーパーの割合は低下する。福井4層の割合は明らかでないが、泉福寺洞窟では11層42点（5.7%）に対し10層173点（1.1%）である。10層の中でも最下部の10c層は、O～5トレンチ44点（1.9%）、7.8トレンチ24点（1.8%）と高くなっている。寒冷化の著しいヤンガー・ドリアス期に位置付けられる4層が329点（5.5%）である点を考慮すると、10層段階は寒冷適応がやや薄れてきた時期と考えられる。安山岩製の大形幅広スクレーパー（69・70）は維持されており、この他縦長剥片製搔器、不定形の小形円形搔器、残核利用の搔器などが検出されている（麻生編1985）。10層段階の細石刃核は、西海技法（福井型細石刃核）が一般的だが両端に細石刃剥離面を持つ泉福寺10層類型（織笠1991、図75）を特徴的に組成している。細石刃（71～74）は、上層に比べ幅狭で短いものが多い。福井4層に見られた石槍は姿を消している。

本層の土器（豆粒文土器）は当地方最古と考えられるが、その出現年代は、福井洞窟3c層の放射性炭素年代約13300BP（16000 calBP）より若干古いと考えられる（柳田2016）。土器の出現により大きく変容したと思われるが、温暖化の始まる約15000 calBPより確実に古く、寒冷適応の形を残している。

③ 泉福寺洞窟7～9層段階

隆線文土器（68）を主体とする文化層で、泉福寺洞窟では最も長期間利用されている文化層で、遺物量も多い。スクレーパー類は197点（0.5%）で、その割合は泉福寺洞窟各層の中で最も低い。縦長剥片の側辺部に調整を施したもの（60）、剥片の両側辺と端部に調整痕のあるもの（61）、周辺加撃石核から剥離された小形貝殻状剥片に加工を施したもの（62）などが検出されている。細かな細調整を施したサイド・スクレーパーが多く、福井4層のように定型化したものは認められない。

狩猟具は細石刃（63～66）を組み合わせた槍であり、10層段階と同様石槍は組成されていない。細石刃は、10層に比べ長さ・幅共にやや大きくなっている。細石刃核は福井型のみで構成されるが、長い細石刃剥離面を持ち打面との角度が鋭角な泉福寺8層類型（67）を特徴的に組成する（麻生編1985）。

福井洞窟3層は、細かな差異点はあるものの基本的には同じと考えられる（鎌木・芹沢1965、鹿又ほか2015）。佐世保市教育委員会による調査では、3層下部（3c層）が泉福寺洞窟の10層、3層上部（3a層）が7～9層のいずれかに対比される（柳田2016）。

④ 泉福寺洞窟6層段階

爪形文土器（59）によって特徴づけられる文化層である。スクレーパー類は、47点（1.8%）でやや高い割合である。黒曜石の縦長剥片製サイド・スクレーパー（53）、安山岩製幅広剥片の先端部に加工を加えたもの（52）、打面を除く全周に調整を施したもの（51）などがある。

狩猟具として、細石刃と石槍が認められる。細石刃（54～56）は下層例よりやや大形である。石槍は横長剥片の両面に粗雑な細調整を加えた破損品である（57）。細石刃核（58）は全て西海技法（福井型細石刃核）であるが、縦型スキー・スボールの割合が他の文化層より高いように思われる（麻生編1985）。

福井洞窟2層もほぼ同じであると思われる（鎌木・芹沢1965、鹿又ほか2015、柳田2016）。僅かに石槍を組成する点は隆線文土器段階との違いであり、後続の直谷岩陰2層との共通点である。

⑤ 直谷岩陰2層段階

スクレーパーは、九州に今までなかつた形態が出現している。縦長の尖頭形を呈し、丁寧な加工を加えた特殊なもの（43・44）である。端部に細調整を行い搔器状に整形したものと、それが明確でないものがある。横長剥片に細調整を加え、縦長の搔器状に加工したものもある。尖頭形搔器の半数ほどには背面調整が施されている。この他、福井4層例に類似する幅広の弧状を呈する搔器が出土している。図45は調整が細かな事例であるが、明確な斜め細調整を施す事例が多い。一部黒曜石が用いられているが、安山岩製が多い。尖頭形のスクレーパーの検出例は少ないが、菰田洞穴3層で類似品が検出されている（川内野編2003）。3層は押型文土器関連資料などが出土地しているが、細石核も認められ、直谷岩陰と同一時期の石器群が含まれている可能性はある。

狩猟具として、細石刃（46）、石槍、石鎌が認められる。石槍は幅広品であるが、両面に調整を施し薄く仕上げている（47）。福井4層例とは、断面形に違いがある。石鎌は平基式の正三角形鎌である（48）。細石刃は完形品が少なく折断されており、微細剥離痕のあるものもある。砂岩・安山岩・玄武岩製の石斧が組成され、神子柴型に近い形態もある。細石刃核（49）は西海技法によるが、側面調整を省略したものが多い。X字状に施文された爪形文土器（50）が共伴する（川内野2008、松尾・川内野2010）。

狩猟具の充実と搔器の形態から、寒冷適応の典型的な姿と考えられる。この時代、花粉分析などからその前後より寒い傾向は伺えるが、明確な寒冷気候ではないように思われる。このような石器群はそれ以前の九州には認められず、北（東）方の集団の移動あるいは交流によって生じた可能性があるが、その実態は明らかではない。

⑥ 泉福寺洞窟5層段階

押引文（刺突文）土器（42）と共に、細石刃石器群の最終末に位置付けられる文化層である。スクレーパー類は、礫面を残す縦長剥片を素材とし右側縁に細調整を加えたもの（35）、大形縦長剥片の左側縁に細調整を施すもの（36）などサイド・スクレーパーが主体である。安山岩と黒曜石が用いられている。

狩猟具は、直谷岩陰2層段階と同じく細石刃、石槍、石鎌である。細石刃（37・38）は、泉福寺洞窟で最も幅広で長い。石槍は柳葉形を呈し、基部は舌部が形成されている（39）。石鎌は、抉りの少ない正三角形状である（40）。細石刃核は側面調整が粗雑なもの（41）が多い（麻生編1985）。寒冷適応ではないが石槍を含んでおり、泉福寺6層段階との共通点が伺える。

⑦ 大原D遺跡II・III層段階

上げ底の条痕文土器（33・34）や無文土器に伴い、数万点の石製品が発掘され、縄文草創期末の代表的遺跡である。スクレーパー類309点検出され、石鎌に次ぐ数量である。III層では円形刃部搔器が大量生産され、大原D・元岡型スクレーパーの原型も多数認められる。円形搔器は西北九州産の黒曜石円礫と結びつき、周辺加撃石核より剥離された厚手貝殻状剥片を素材とする小形品として完成された姿を見せる（26・27）。大原D・元岡型スクレーパーは搔器と削器の区別が明確でなく、形態的な完成度も低いと言える（24・25）。I層例（図152 O89）はやや寸詰まりであるが、58次地点IV層例と良く類似している。

狩猟具として石鎌と石槍がある。石鎌は二等辺三角形を呈するもの（28～30）を主体とし、縄文草創期末の北部九州に特徴的な形態である。石槍は完成度の低い粗雑なもの（31）である（池田ほか2003）。完成された円形刃部搔器などから、寒冷適応の典型的な姿と考えられる。

⑧ 元岡・桑原遺跡群 58次地点IV・III③層段階

条痕文土器（22）や撚糸文土器に伴い、大原D遺跡に後続する石器群が認められる。大原D・元岡型スクレーパーと円形搔器が検出されている。何れも黒曜石と安山岩を素材とし、完成された姿であ

時代	歴年 cal BP	文化層	スクレーバー類	狩猟具	その他の	寒暖
縄文早期	11,000	松木田3次	1, 2, 3	4, 5, 6, 7, 8	9, 10, 11, 12	暖(元新世)
		元岡・桑原58次 IV・III③	13, 14, 15	16, 17, 18, 19, 20	21, 22, 23	寒(ヤンガードリアス期)
	12,000	大原D II・III	24, 25, 26, 27	28, 29, 30, 31	32, 33, 34	
縄文草創期	13,000	(+) 泉福寺5	35, 36	37, 38, 39, 40	41, 42	暖(アレード)
		直谷2	43, 44, 45	46, 47, 48	49, 50	寒(オルダードリアス)
14,000	泉福寺6	51, 52	54, 55, 56, 57	58, 59		暖(ベーリング)
	泉福寺7~9	53	63, 64, 65, 66	67, 68		
	15,000	60, 61, 62				
16,000	泉福寺10	69, 70	71, 72, 73, 74	75, 76		寒(最終氷期寒冷期)
	旧石器	77, 78	79, 80, 81	82	83, 84	

図137 寒冷適応とスクレーバー等の変遷(石器1/3 大形石器・土器1/4~1/8)

る。円形搔器は大原DⅢ層例より大形（15）で、大原D・元岡型スクレーパーは拇指状のもの（13）と縦形の搔器状のもの（14）がある。引き続き、寒冷適応が維持されていると考えられる。

狩猟具は石鏃と石槍である。石鏃は三角形鏃（16・17）も残存するが、やや深い抉りを入れ脚部の尖るもの（18・19）が主体となり、研磨を施す例（19）の割合も高くなる。石槍は丁寧な細調整を施し、形態的にも完成されている（20）。

⑨ 松木田遺跡段階

石鏃（4～6）や石槍（7・8）は発達しているが円形刃部搔器は姿を消し、縦長剥片を素材とするサイド・スクレーパー（1～3）が主体となる。石鏃や石槍に磨製技術を用いるのが特徴で、福岡地方ではその割合が最も高い。縦形のサイド・スクレーパーは温暖期に発達する器種であり、図137に示すように断続的に現れている。土器は尖底の撫糸文土器（9～12）を主体としており、刺突文土器主体の福岡地方では特殊な遺跡と言える（米倉2001）。

（4）スクレーパーの変遷と大原D・元岡型スクレーパーの成立意義

図137から寒冷期に、縦長・横広・円形の各種スクレーパー類が発達する様子が明らかであるが、その形態的特徴は、それぞれ異なっている。狩猟具も各段階で形態的な違いがある。これらのスクレーパー類は、皮革加工を行う寒冷適応の一つの在り方と考えられる（堤2000）。スクレーパー類の形態的变化は狩猟具とも関わっており、狩猟活動と相關しているものと思われる。ただ、ナイフ形石器文化は基本的に寒冷期の石器群であるが、各期にスクレーパー類が発達する訳でなく、他の要素が関係しているものと思われる。それは、人類集団そのものに帰せられよう。

福井4層段階を特徴付けるスクレーパー類は、弧状に調整を施した規格的なものである。安山岩製幅広剥片に斜め細調整を施しており、その後の北部九州寒冷期に現れるスクレーパーの原初形態と言え、少しずつ形態的に変化しながら長期間存続する。その後、土器出現期の泉福寺10層段階でもほぼ同じ形態のスクレーパーが認められ、寒冷適応が維持されているものと思われる。ただしその割合は低下し、狩猟具も石槍が消滅し、細石刃核の形態も大きく異なっている。

その後、寒冷適応が現れるのは直谷岩陰2層段階である。福井4層段階の発展と考えられる、幅広剥片の端部に弧状に細調整を加えたものがある。その中には拇指状のものもある。その他、尖頭形を呈するもの（縦長状搔器）が新たに加わる。この形態の搔器には、背面細調整を施したもののが認められ、従来とは異なる形態と言える。細石刃と共に石槍や石鏃も組成され、新たな狩猟行動による寒冷適応と思われる。従来の北部九州には使用されていない石器が存在することから、他地域の人類集団との接触あるいは移動によって成立した可能性が指摘出来る。

次は、最後の寒冷期であるヤンガー・ドリアス期の初期に位置付けられる大原DⅢ層において、寒冷適応の典型的な姿が認められる。ただし、スクレーパー類は極端に小形化している。西北九州産黒曜石円礫を素材とする周辺加擊石核から剥離された、厚手の貝殻状剥片を用いた円形搔器が多数製作している。この搔器は細石刃文化において粗雑なものが組成されているが、大原DⅢ層において完成されたと考えられる。当初は他の地方の影響を受けたものであるが、西北九州で独自に発達したものと考えられる。小形円形搔器はII層では急激に衰え、58次地点Ⅲ③層ではやや大形化している。大原D・元岡型スクレーパーは形態的に完成しておらず、形状・細調整とともに定型的でない。ただ、I層には寸詰まりながら完成された形態が認められる。狩猟具は二等辺三角形鏃主体となるが、石槍は定型化しておらず、福井4・直谷2段階とは異なっている。

58次地点IV・Ⅲ③層段階も寒冷適応が認められる。福井4層から泉福寺10層段階への変化と、同じようなことが起こっているようである。大原D・元岡型スクレーパーは完成しており、拇指状のもの（図137 13）と縦長搔器状のもの（14）がある。背面調整を行う点は直谷2層の尖頭形スクレー

バーと同じであり、その影響を受けた可能性がある。ところが、大原D14区Ⅲ層には尖頭形の形態は認められず、直接の影響は考えられない。ただ、背面調整を施したスクレーパー類の割合は高く、福岡地方を特徴づけている。また搔器の小形化が著しく、寒冷適応における対象動物の変化も想定される。

前述のように、大原D・元岡型スクレーパーは大原DⅢ層より時間をかけて形態的完成度を高めたと考えられ、福岡地方を中心とする地域で発達した石器である。拇指状・縦長搔器などいくつかの形態があるが、その原型は大原DⅢ層に既に存在している。スクレーパーを中心とするこの段階の寒冷適応は、他の地域の人類集団との接触によって開始されたと思われ、石器製作にも影響を受けたと思われる。それを学習し、完成された形態へと導いたのは、この地域に長期間居住していた人類集団であると考えられる。それは、周辺加撃（求心状剥離）石核と、それより剥離された剥片を素材とする円形スクレーパーによって継続してきたのである。大原D・元岡型スクレーパーは、この地域における人類集団が長期間存続していたことを示す道具と考えられる。

松木田段階には石鏃・石槍（研磨品を含む）が発達するが、寒冷適応を特徴付ける刃部円形搔器は姿を消している。大原Dや58次地点下層は、寒冷期に行われた特殊な活動の最後の姿である。その人類社会の一端は、大原D・元岡型スクレーパーによって良く理解できる。

引用・参考文献

- 麻生優編1985『泉福寺洞穴の発掘記録』（佐世保市教育委員会）
- 池田裕司・菅波正人・山口譲二・吉留秀敏・荒牧宏行・星野恵美2003『大原D遺跡群4－大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告 縄文時代編一』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集）
- 織笠明1991「西海技法の研究」『東海大学文学部紀要』54
- 鹿又喜隆ほか2015「九州地方における洞穴遺跡の研究—長崎県福井洞穴第三次発掘調査報告書一」『東北大学総合学術博物館紀要』No14
- 鎌木義昌・芹沢長介1965「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』第3巻1号
- 川内野篤編2003『菰田洞穴発掘調査報告書』（平成14年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）
- 川内野篤2008「直谷稻荷神社岩陰遺跡の発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）
- 菅波正人・吉留秀敏・池崎譲二・松村道博2004『元岡・桑原遺跡群3－第3・4・8・11次調査の報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集）
- 堤隆2000「搔器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第47巻第2号
- 長家伸・米倉秀紀・加藤隆也2013『松木田3－松木田遺跡第4次調査1～3・7・8区の報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1204集）
- 萩原博文2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号
- 萩原博文2008「泉福寺洞穴の縄文草創期石器群」『九州旧石器』第12号
- 春成秀爾・小林謙一編2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第154集）
- 松尾秀昭・川内野篤2010「直谷稻荷神社岩陰遺跡の範囲確認調査」『市内遺跡発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）
- 柳田祐三2016『福井洞窟発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）
- 山崎純男・小畠弘己1983『柏原遺跡群I－縄文時代遺跡F遺跡の調査－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集）
- 米倉秀紀2001『松木田遺跡群2－第3次下層（縄文時代早期）遺物編一』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第686集）